

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力(21)

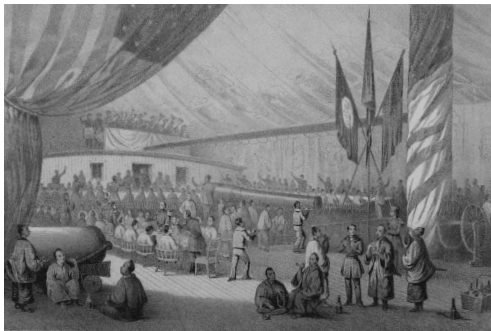
な存在であり、直接、命令が下せる旗艦に搭乗させていたものと考えられます。

■多くの絵が報告書に使われ、提督の期待に応える

遠征艦隊は中国海域を北上して琉球の那覇に到着。ここから、サスケハナ号とサラトガ号は「ボニン諸島」と呼ばれ、国際的に領有権が明確でなかった小笠原諸島へ調査に向かい、ハイネも筆をとり続けました。その後、那覇に戻って相模の浦賀沖に四隻で姿を現したのは邦暦の嘉永六(1853)年六月三日のことでした。

この時、ペリーは徳川幕府に大統領親書を提出し、翌年の再来を告げて江戸湾を離れます。そして、約束通り翌、嘉永七(1854)年一月十六日に浦賀へ入港しました。ハイネは、この二度の来日を通じて幕府と和親条約の締結交渉が行われる中、交渉場面や日本文化の一端を描写しました。

艦隊のアメリカ帰国後、この遠征を通じて描かれた約400枚のハイネの絵は、木版や石版にされて公式報告書に添えられました。さらに、議会の命令を受けて印刷された、宣教師のフランシス・ホークス編纂の*Narrative of the Expedition*



ハイネ画「ポーハタン号での正餐」

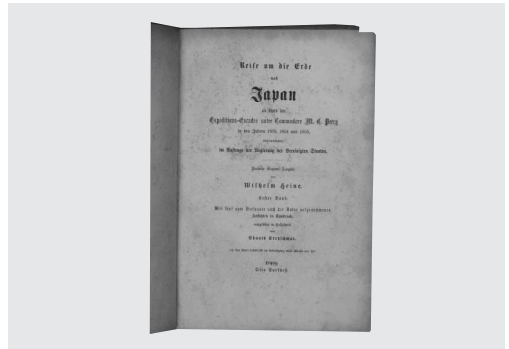
(『中国及び日本へのアメリカ艦隊遠征記』より)

of an American Squadron to the China Seas and Japan..., (Washington[D.C.], 1856. 『中国及び日本へのアメリカ艦隊遠征記』—本学図書館所蔵—)の挿絵に使われ、重要な部分で臨場感を示し、ペリーの期待に応えました。

■日本についての自著がシーボルトを刺激

この年、ハイネはホークス編纂の遠征記に使われなかった絵や別に書きためたスケッチを用

いて自ら*Reise um die Erde nach Japan: an Bord der Expeditions-Escadre unter Commodore M. C. Perry...* (Leipzig, [1856]. 『世界周航 日本への旅: ペリー提督の遠征艦隊に搭乗して』—本学図書館所蔵—)を母国ドイツから出版(写真)しました。内容は画集ではなく文章中心にした



構成で、ホークス編纂の遠征記と似通った部分はありますが、日本の文化と人々の姿を大まかに記述しています。

本書はオランダ語やフランス語でも刊行されましたが、原著の内容については間違いも生じており、前述のシーボルトから厳しい批判を受けました。シーボルトの批判は本書だけを対象にしたものではありませんが、彼の息子の書物によれば、後にシーボルトが*Hundert und ein Irrtum über Japan* (『日本に対する荒唐無稽の誤解』)として著述する予定⁽³⁾であったことを述べ、ハイネも当然、これらの批判を熟知していたものと思われる。

ハイネは4年後に、*Japan und seine Bewohner; Geschichtliche Rückblicke und ethnographische Schilderungen von Land und Leuten.* (Leipzig, [1860]. 『日本とその住民—土地と人間の歴史的展望と民族学的記述』—本学図書館所蔵—)を

